

「情報処理基礎」科目に携わって想うこと

教育地域科学部 生活科学教育講座 塚本 充

■「情報処理基礎」開講

福井大学に共通教育科目「情報処理基礎」の授業が開講されて9年目になります。この授業のために教育地域科学部2号館の2階に「情報処理演習室」が用意され、99台の学生用パーソナルコンピュータ(PC)が設置されました。この部屋のPCも初代のFMV-6350DX2から3代目の現行機のFMV ESPRIMOに至っており、オペレーティングシステムもWindows NT Workstation 4.0から、Windows 2000 Professionalを経て、現行のWindows XP Professionalになりました。その間、PCのCPUクロック周波数は、350MHzから2800MHz(2.80GHz)へと8倍になり、内蔵メモリも64MBから1024MB(1GB)へと実に16倍にもなりました。授業の内容や効率、受講生の理解度合が機器の性能アップに見合うかどうかはいずれ検証の必要がありそうです。

■講義ガイドの執筆・発行

「情報処理基礎 講義ガイド」は、「講義のテキストのようなものではなく、講義の筋立てを示すものであり、とくに、福井大学のシステムの特徴を反映したものが望ましい」という情報処理基礎科目準備委員会においていたった結論の趣旨に沿って作成されました。準備の始まった1998年度には、「教科書」という位置づけも検討されましたが、当時の福井大学の全新生に「教科書」として購入を求めることは多くの教官の理解を得られないという意見も出され、講義で最低限取り扱ってほしい内容を示したガイドという位置づけで「講義ガイド」に落ち着きました。この点の確認に数ヶ月の時間を費やしたことは、いずれはよい思い出になることでしょう。なお、現在ほぼ実費で頒布されているこの「講義ガイド」は、初版の1999年度発行以来数年間は、大学の経費で作成・印刷・発行され、新生と全教員に無償で配布されました。本講義ガイドは、情報処理演習室のコンピュータ構成が変わる時期を中心に2007年度までの9年間に大改定を3回経験しました。1冊あたりのページ数も1999年度版の71ページに始まり、巻末アンケートを綴じ込んだ2006年度版の91ページを最高に2007年度版では

87ページに収まっています。これも歴代の情報処理基礎関係の第四部会長で編集委員長をも兼任された先生方の多大なるご尽力のおかげだと感じています。

■高校普通教科「情報」の影響

「情報処理基礎」担当者にとって、高等学校での普通教科「情報」の必修化はまさに「黒船」に相当する外圧でした。2006年度の入学生がその対象学生の「ハズ」でした。いつ来るかがわかっている点で「黒船」とは異なりますので、どのような対策をなすべきかを共通教育第四部会の幹事会においてのみならず、幹事や授業担当者同士でも会うたびに繰り返し議論しました。結局、状況を見据えて、今後の対策を練ろうということになり、2006年度の授業は、例年通り開始されました。例年以上に受講生の理解状況に気を配りつつ進めました。しかしながら、例年と特段の変わりもなく、ある意味では拍子抜けでした。その後、多くの高等学校において、「情報」の未履修問題が発覚して、受講生の「情報スキル」が例年通りであったことに納得しました。さらに、多くの高等学校が卒業を目前として2月や3月に情報の補習をしてきましたから、2007年度を受講生にとっては、4月からの情報処理基礎の授業は、年度末からの続きのようなものとなり、現役生といわゆる浪人生とのPCのスキル差が大きく現れてしまい、授業の進め方にいつも以上に工夫が必要となりました。未履修の「ツケ」が大学側に回ってきていることを強く感じました。

■「情報処理基礎」の今後の展開

今後の新生には、コンピュータやネットワーク利用のリテラシーが備わってくることが予想されますので、いずれ本科目は、開講の必要がなくなるだろうというのが、担当者の大方の意見のようです。そして、本学特有のPC利用やネットワーク利用に関しては、総合情報処理センターの新生へのガイダンスや大学教育入門セミナーに任せればよいというわけです。ただ、情報処理センターの頃からセンター教員を兼任している塚本にその役目が回ることは明らかですので、自分にとっては何も変わらないことになりそうです。